世界の舞台を目指すバレエダンサーのキャリア形成を支える教育方針の提案

Proposal of Guidelines to Support the Career Development of Aspiring Ballet Dancers

トップスポーツマネジメントコース
5024A309 中濱 瑛
研究指導教員：平田 竹男教授

1. 背景

バレエは世界中で高い芸術性を評価される舞台芸術であり、多くのジュニアダンサーがプロフェッショナルを目指している。しかし、プロとしてバレエ団に所属するまでの具体的な道筋や成功要因は必ずしも明確ではない。特に、国際的に活躍するバレエダンサーたちがどのような教育を受け、どのような選択を経てキャリアを構築したかに関する実証的な研究は限られている。また、日本ではバレエ教室がジュニアダンサー育成の中心となっているが、トップダンサーになるための体系的な指導方法が欠けており、多くの潜在的才能が十分に発揮されないままバレエを離れている。このような現状を改善し、世界で活躍するダンサーを輩出するためには教育方針や指導方法の確立が課題となっている。

2. 目的

本研究の目的は、世界の主要なバレエ団に所属するダンサーの経歴（出身バレエ学校、コンクール歴、オーディション歴、幼少期に学習したバレエメソッドなど）を踏まえ、ジュニアダンサーを国際的なキャリアへ導くために、バレエ指導者が認識すべき点を明らかにすることである。

3. 研究方法

本研究ではロイヤル・バレエ団、パリ・オペラ座バレエ団、マリインスキー・バレエ、オーストラリア・バレエ団、香港バレエ団、シンガポールバレエに所属するダンサーと世界のトップバレエ団に所属した経験を持つ日本人ダンサーを対象とした。

1) 世界のバレエ団所属ダンサーの経歴調査

世界の主なバレエ団（パリ・オペラ座、ロイヤル・バレエ団、マリインスキー・バレエ、オーストラリア・バレエ、香港バレエ団、シンガポールバレエ）の公式ウェブサイトや公開資料を基に、492 人の所属ダンサーの出身校や国籍に関する情報を収集した。

さらにシンガポールバレエ所属ダンサー(現所属 13 人と元所属ダンサー4 人）と世界のバレエ団に所属する日本人ダンサーを対象にバレエを始めた年齢、バレエ学校入学までの経緯、学習したバレエメソッドのアンケート調査を実施した。

2) 世界のコンクールとバレエ団の関係性の分析

各種コンクール（例：ローザンヌ国際バレエコンクール、Youth America Grand Prix）の入賞者が所属したバレエ団を分析し、コンクールがプロキャリアに与える影響を調査した。

3) 世界トップクラスのバレエ団に所属した経験を持つ日本人バレエダンサーのキャリア形成

世界トップクラスのバレエ団に所属した経験を持つ日本人バレエダンサー3 人を対象に、バレエ団に所属するまでの経緯、成功要因、コンクールやオーディションの役割について深掘りしたインタビューを実施した。

4) バレエメソッドと指導者育成プログラムの調査

世界の主要なバレエメソッド（例：ロシア・メソッド、フランス・メソッド、R.A.D.など）のシラバス調査を公開情報にて実施した。また、世界のバレエ学校（例：パリ・オペラ座バレエ学校、ロイヤル・ウィニペグバレエ学校）の卒業生から進級試験や教育プログラムについてインタビュー調査を行った。さらに日本のバレエ教室の教育方針に関して情報を収集し、それぞれの内容を比較した。

5) 他競技のトレーニング方法の比較分析

他スポーツ競技の幼少期トレーニングに関して情報収集し、バレエ教室の教育方針との比較をした。

4. 結果

1) 世界のバレエ団所属ダンサーの経歴

ロイヤル・バレエ団の 103 人中 83 人、パリ・オペラ座バレエ団の 149 人中 105 人、マリインスキー・バレエの 74 人中 62 人が提携校出身だった。オーストラリア・バレエ団でも 75 人中 53 人が提携校の出身であった。

シンガポールバレエには 2024 年 12 月時点で 9 か国から 39 人のダンサーが所属しており、オーストラリア、日本、シンガポールの 3 か国の出身者が全体の 75%を占めていた。所属ダンサーの出身校では、提携校の出身者はわずか 2 人で、多くはオーストラリアやイギリス、カナダなどバレエ学校出身であった。アンケート調査では、平均 5.5 歳でバレエを始め、地元のバレエ教室で基礎を学んだ後、異なるバレエメソッドに基づく教育を受けていた。また、香港バレエ団では提携校の出身者がおらず、37 校の異なる出身校が確認された。

2) コンクールとバレエ団入団との関係

ローザンヌ国際バレエコンクールの日本人受賞者 33 人中 31 人が受賞後にプロのバレエ団に所属していた。YAGP では、102 人中 63 人がバレエ学校への短期または長期スカラシップを得ていた。特にローザンヌ国際バレエコンクールは、技術力や芸術性の評価だけでなく、バレエ学校やバレエ団とのネットワーク構築を促進する場となり、バレエ団入団の重要なステップであった。

また、ロイヤル・バレエ団では所属ダンサー103 人中 33 人がコンクール出場者であり、ヨーロッパのバレエ団はローザンヌ入賞者を積極的に採用する傾向が強いことが明らかになった。

3) 幼少期の教育方針

現役または元シンガポールバレエ所属ダンサーの 17 人中 8 人は幼少期に R.A.D.メソッドで学習し、ロシア・メソッドでは 2 人であった。また、幼少期に学習したバレエメソッドが不明と答えた 4 人は全員日本人であった。

プロフェッショナルトレーニングを始めたバレエ学校では 17 人中 11 人が幼少期とは異なるバレエメソッド

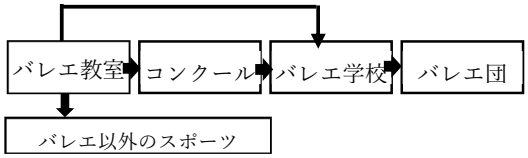
で学習していた。

4) 世界トップクラスのバレエ団に所属経験のある日本人バレエダンサーのキャリア形成

共通した課題として語学や海外生活への順応といったバレエのスキル以外の面で苦労したことが挙げられた。

また、コンクールではなく直接バレエ学校とコンタクトを取って入学した、対象の日本人ダンサーは 11 人中 6 人おり、対象のシンガポールバレエ所属ダンサーは 17 人中 12 人いた。自らバレエ学校に履歴書や映像を送ることで、バレエ学校の果たし、そこから、学校での推薦や紹介等を通じてバレエ団への入団を果たしていた。

また、インタビュー調査を行った石井久美子、飯島望未、根本里菜の 3 人はいずれも幼少期からバレエを始め、15 歳～17 歳で留学を経験していた。彼らは確立されたバレエメソッドや教育環境で学び、それぞれ 19 歳までにはプロとしてのキャリアを確立していた。共通して留学中に語学や身体的特徴の違いに悩むことがあったが、目標達成への強い意志と家族のサポートが成功の鍵となっていた。



5) 他競技

他競技では、選手の能力向上を目指した科学的で段階的なトレーニングが実施されていた。年齢や能力に応じた指導や客観的データに基づくパフォーマンス分析が一般的であった。一方、バレエ教育では統一されたプログラムやデータ分析が十分に普及しておらず、指導の質は教室や指導者によってばらつきがあった。

5. 考察

1) トップバレエダンサーへの道程を意識した指導

トップバレエダンサーへのステップは一定の道程がある。したがって、指導者はこの道程の各段階に必要な指導があることを認識し、生徒にかかわることが肝要と考える。ロイヤル・バレエ団のような大規模なバレエ団所属者の大半は提携校の出身者で、中小規模のバレエ団所属ダンサーも出身バレエ学校は多様だが、バレエ学校を経ている人がほとんどであった。この事実をふまえると、バレエ学校へ進学するまでの指導について熟考するべきと考えられた。

世界トップクラスのバレエ学校へ進むことができる道としてコンクールで入賞し、スカラシップを獲得することで可能性が広がる場合がある。特にローザンヌ国際バレエコンクール級のコンクールは、バレエ団入団の中間段階として機能しているといわれている。このようなコンクールで評価されるためには技術力だけでなく、芸術性や表現力が必要である。したがって、これらの強化のための指導もトップを目指すダンサーには実施するべきと言える。

コンクールを経由せずに自主的に履歴書や映像をバレエ学校へ送ることで入学の機会を得るパターンもあるが、バレエ学校での推薦や紹介そのアプローチにおいては、指導者がもつコネクションも大きく影響することから、指導者には世界とのネットワークを構築していくことも求められる要素であり、生徒の可能性を広げる手段となることを考慮すべきである。

2) 幼少期の教育方針

多くのダンサーが幼少期に R.A.D.やロシア・メソッドなど、何かしらのバレエメソッドに基づく指導を受けていた。一方で、バレエ学校に進学すると、幼少期に学んだバレエメソッドとは異なるバレエメソッドを学ぶ傾向がみられた。このことから、R.A.D.やロシア・メソッドといった体系的なカリキュラムに基づく指導は、基礎技術の習得と芸術性の育成を両立させるだけでなく、バレエ学校に入学後バレエメソッドが変更された場合にも柔軟に対応できる基礎力を高める可能性のある指導法と考えられた。

3) 留学とその後の将来をふまえた指導

留学はプロフェッショナルキャリアを築くための重要なステップであり、その準備として適切な指導が必要であると考えられる。具体的には留学中の語学や異文化への適応、そして異なる身体的特徴への理解を深める支援やダンサー自身が留学先で直面する課題を乗り越える力を育むため、語学教育や海外生活に必要なスキルを補完的に提供することが必要であると考えられる。

4) 他競技から学ぶ幼少期の育成方法

日本のバレエ教育では、他競技のような進級基準や体系的な指導法などには再考の余地がある。教育者育成は、国際的な資格や研修プログラムを導入での解決もその一つと期待される。一方カリキュラムについては他競技のように、選手の特性を科学的に把握し、進捗を評価する仕組みをバレエ教育にも応用し、科学的データに基づくトレーニングや段階的な教育が取り入れられれば、ダンサー個々の課題に応じた指導が可能になり、バレエ教育の効率性や効果が向上すると考えられる。

5) 研究の限界と今後の展望

本研究のアンケート調査の対象がシンガポールバレエ所属ダンサーに限られているため、他国のバレエ団所属ダンサーについて今後追加調査が必要である。

6. 結論

ジュニアダンサーが世界のバレエ団に所属し、活躍するためには、指導者が幼少期から体系的で質の高い教育を提供し、特定のバレエメソッドに基づく指導が求められる。プロフェッショナルキャリア形成の基盤は指導者に大きく依存しており、専門的な知識と経験を備えた指導者を選ぶことが重要である。

また、留学やコンクールはプロフェッショナルへの重要なステップであることを踏まえ、指導者は生徒がこれらの機会を最大限に活かせるよう、技術指導のみならず語学や異文化適応能力の育成に留意すべきである。

さらに、日本のバレエ教育には、統一された進級基準や科学的データに基づくトレーニングの導入が必要であり、これらの改善を通じて、より多くの日本人ダンサーが世界で活躍するトップダンサーとして背徴することが期待される。